

高齢者に対するイメージと行為の発達的变化の研究 —小学生・中学生・高校生の高齢者に対する意識の調査から—

柴 田 益 江

I. はじめに

今日、わが国においては、高齢化が急速に進展し、高齢者の数が増加しているにもかかわらず、都市化や核家族化の進行により、日常の生活において、子どもたちが高齢者と接する機会は減少している。

将来の高齢化社会を支えるのは、現在の児童の世代であり、これからの将来を見越すと高齢化社会を踏まえた児童の健全育成を推進することが重要な課題として挙げられる。このような取組みとして、小学校から高齢者との関わりなどに関する取り組みを実施していたり、幼稚園・保育所でも高齢者施設との融合施設や行事ごとに参加するなどの取り組みを実施している。

しかしながら、上記で示されたような児童の健全育成や幼稚園・保育所での取り組みに関する研究は行われているものの発達別に検討された研究が多い。したがって、基礎研究としてこれからの高齢化社会を支える子どもたちの高齢者に対する行為やイメージの発達的变化を捉えることが大切になるかと思われる。このような研究を行うことで、これから学校教育などで高齢者と関わる機会を設ける上で基礎的資料になると考えられるからだ。

そこで、本研究では、第一段階の調査として、小・中・高校生の高齢者に対する行為およびイメージに関する質問紙を作成し、妥当性を検討するため因子分析を行った上で群間の比較を行うことを目的とする。さらに、この研究を基盤として発達段階に応じた高齢者に対するイメージや行為などに影響を与える要因の検討に繋げていくことである。

II. 調査

II. 方法

1) 調査対象者

調査の対象は、小・中・高校生の調査では、

P市1つの小学校の3-6年生全員、1つの中学校1-3年生全員、1つの高校の1-3年生である。

2) 調査時期

2009年6～8月である。

3) 調査方法

調査の方法は、クラス単位の集合調査である。クラス毎に調査票を配布し、教師が質問を読み上げ、その指示にしたがって生徒が回答を記入した後、ただちに回収する方式である。

※小学生の質問紙への表記は、漢字・平仮名に配慮した。

回収票は、小学生197名、中学生316名、高校生326名、合計837名である。

4) 調査項目

①年老いた祖父母や高齢者に対する行為

②高齢者に対するイメージ

※詳細は下記に記す。

①年老いた祖父母や高齢者に対する行為

祖父母や高齢者と交流したり、触れ合う機会がある、もしくはあった児童・生徒を対象にして、具体的に「年老いた祖父母・父母」や「高齢者・お年寄り」に対して、下記のような行為をしたことがあるかどうか、をたずねた。その際、杉井(2007)¹⁾の不適切対応を指標化した15項目を用いた。「よくある」、「たまにある」、「あまりない」、「まったくない」、の4件法で回答を求めた。

- (1) お年よりに、こうすればこまるだろうと気づきながら、こまらせるようなことをしたことがありますか？
- (2) お年よりに、ふれあう機会(きかい)があったときに、あえて声をかけないことがありますか？
- (3) お年よりに、早くしなさいと、いそがせたことがありますか？
- (4) お年よりに、名前ではなく、「おばあちゃん」

- 「おじいちゃん」とよぶことがありますか？
- (5) お年よりに、ひとりではできないと分かっている、手だすけをしないことがありますか？
- (6) お年よりに、大声でおこることがありますか？
- (7) お年よりに、赤ちゃんことばをつかうことがありますか？
- (8) お年よりに、子どもあつかいをしたことがありますか？
- (9) お年よりに、めいれいしたい方で、話したことがありますか？
- (10) お年よりに、話しの中に入れさせないようにしたことがありますか？
- (11) お年よりに、話しかけられても、聞こえていても、聞こえなかったふりをしたことがありますか？
- (12) お年よりに、できなかつたり、しっぱいしたことをおこったことがありますか？
- (13) お年よりに、聞こえるようにイヤミをいったことがありますか？
- (14) お年よりに、かかわりたくない、ほったらかしにしたことがありますか？
- (15) お年よりに、必要な食事・トイレ・おフロなどの世話(せわ)を分かっていて、しなかつたり、手ぬきをしたことがありますか？

②高齢者に対するイメージ

高齢者のイメージをとらえるにあたっては、アメリカの心理学者Osgood,C.E.が考案したSemantic Differential Method (SD法)がある。SD法は情緒的意味を測定する技法であり、連想法と尺度法が結合されたものである。具体的には、「明るいー暗い」「良いー悪い」などの正反対の意味をもついくつかの形容詞対からなる尺度上に測定対象を評定させ、その評定点の分析によって測定対象間の意味差を判別する方法である。中野ら(1993)²⁾は18項目のSD尺度を用いて、小・中学生を対象に高齢者イメージをとらえている。ここでは、杉井(2009)³⁾が用いた19項目からなるSD法でたずねた。以下、ポジティブな形容詞とネガティブ形容詞19項目である。

「優しいー怖い」「暖かいー冷たい」「嬉しいー

悲しい」「正しいー正しくない」「ひどいーすばらしい」「美しいーみにくい」「話しやすいー話しにくい」「きれいー汚い」「病気がちなー元気な」「手伝ってくれるーじゃまをする」「良いー悪い」「きちんとしたーだらしない」「暇そうー忙しそう」「愚かなー賢い」「早いー遅い」「大きいー小さい」「弱いー強い」「鋭いー鈍い」「自立ー依存」

5) 研究の倫理的配慮

対象者へのプライバシーを配慮して、本研究では、すべて数量的に処理を行った。

6) 分析方法

回収サンプル数837名の内、祖父母や高齢者と交流したり、触れ合う機会が「1よくある」、「2たまにある」に回答したひとで、かつ質問①、②でいずれかの項目に回答したサンプルを有効回答者として分析対象とした(表1参照)。尚、①、②でいくつかに無回答であった場合は①には2.5、②は3をそれぞれあたえた。内訳は下記に記す。

表1 サンプル表

	回収サンプル数	有効なN
小学生	197	182
中学生	315	271
高校生	325	230

次に因子分析についてだが、主因子解法およびVarimax回転を用いた。なお、因子分析後、因子負荷量が0.4以上のものを項目として妥当性があると判断し、それぞれの因子名を著者でつけた。

次に妥当性がある因子ごとの素データにおける群間の平均値を算出後、項目ごとに一要因分散分析を行った。なお、主効果が有意であった場合は多重比較を行った。

Ⅲ. 結果

(1) 年長いた祖父母や高齢者に対する行為と高齢者に対するイメージの因子分析結果(表2-1、表2-2参照)

調査項目①：年長いた祖父母や高齢者に対する行為

第一因子に負荷が高い項目は、「大声で怒る」「急がせる」「命令した言い方」「失敗を怒る」「困ら

せる」などである。「怒り」と命名した。

第二因子に負荷が高い項目は、「関わりたくない」「聞こえなかったふり」「いやみ」「話のなかに入れない」「わざと世話をしない」などである。「無視・いやみ」と命名した。

第三因子に負荷が高い項目は、「こども扱い」「赤ちゃんことば」などで、「子供扱い」と命名した。第四因子に負荷が高い項目は、「声をかける」「手助け因子」などで、「声掛け・手助け」と命名した。
調査項目②：高齢者に対するイメージ

第一因子に負荷が高い項目は、「暖かい」「優しい」「嬉しい」「すばらしい」「話しやすい」「正しい」などである。高齢者の温和性（内面）を評価する因子で、「温かい・優しい」と命名した。

第二因子に負荷が高い項目は、「強い」「早い」「鋭い」「大きい」「元気な」「忙しそう」「自立」などである。高齢者の力や動き（外面）を評価する因子で、「元気・壮健」と命名した。

第三因子に負荷が高い項目は、「きちんとした」「良い」「手伝ってくれる」「賢い」などである。高齢者の有能さ（内面）を評価する因子で、「きちんとした・良い」と命名した。

第四因子に負荷量が高い項目は、「美しい」「きれい」などである。高齢者の審美性（外面）を評価する因子で、「美しい・きれい」と命名した。

表 2-1 因子分析結果（質問①「年老いた祖父母や高齢者に対する行為」）

	因子			
	1	2	3	4
大声で怒る	.698	.212	.222	.124
急がせる	.594	.113	.081	.268
命令した言い方	.585	.270	.319	.055
失敗を怒る	.495	.427	.284	.120
困らせる	.352	.161	.110	.298
関わりたくない	.152	.761	.075	.331
聞こえなかったふり	.294	.607	.162	.239
いやみ	.419	.534	.244	.123
話の中に入れない	.257	.422	.316	.260
わざと世話をしない	.121	.373	.145	.284
こども扱い	.195	.141	.831	.111
赤ちゃんことば	.207	.157	.542	.119
声をかける	.101	.227	.050	.591
手助け	.177	.184	.141	.500
因子名	怒る	無視・いやみ	子供扱い	声掛け・手助け
固有値	2.040	2.018	1.469	1.150
寄与率	14.6	14.4	10.5	8.2
累積寄与率 %	14.6	29.0	39.5	47.7

表 2-2 因子分析結果（質問②「高齢者に対するイメージ」）

	因子			
	1	2	3	4
暖かい	.699	.072	.264	.096
優しい	.667	.040	.111	.102
嬉しい	.559	.239	.252	.269
すばらしい	.539	.247	.270	.402
話しやすい	.508	.251	.276	.262
正しい	.483	.186	.264	.260
強い	.063	.749	.066	.106
早い	.148	.612	.141	.153
鋭い	.087	.609	.103	.131
大きい	.096	.598	.061	.125
元気な	.339	.473	.255	.136
忙しそう	.181	.467	.203	.128
自立	.036	.427	.293	-.011
きちんとした	.333	.204	.701	.206
良い	.475	.226	.664	.177
手伝ってくれる	.371	.204	.636	.216
賢い	.233	.324	.392	.152
美しい	.358	.266	.180	.757
きれい	.338	.289	.312	.618
因子名	暖かい・優しい	元気・壮健	きちんとした・良い	美しい・きれい
固有値	2.990	2.903	2.213	1.592
寄与率	15.7	15.3	11.6	8.4
累積寄与率 %	15.7	31.0	42.7	51.0

(2) 年老いた祖父母や高齢者に対する行為と高齢者に対するイメージの発達的变化

①年老いた祖父母や高齢者に対する行為

図 1-1・2・3・4

<怒る>

分散分析の結果、主効果 (F(2,2731) = 2610.43, p <.01) が認められた。そこで多重比較を行ったところ、小学生と中学生で「怒る」による違いがあった (p<.05)。また、小学生と高校生、中学生と高校生で「怒る」による違いがあった (p<.01)。

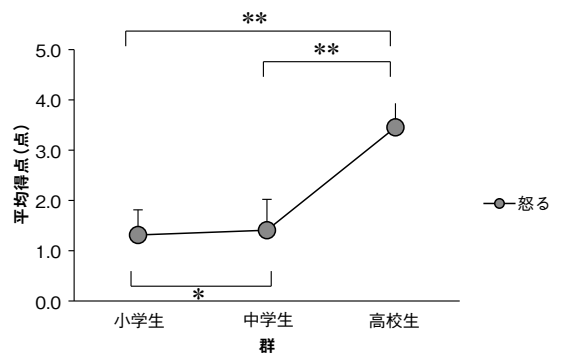


図 1-1 怒る

<無視・いやみ>

分散分析の結果、主効果 ($F(2,2731) = 3643.64$, $p < .01$) が認められた。そこで、多重比較をおこなったところ、小学生と中学生、小学生と高校生、中学生と高校生で「無視・いやみ」による違いがあった ($p < .01$)。

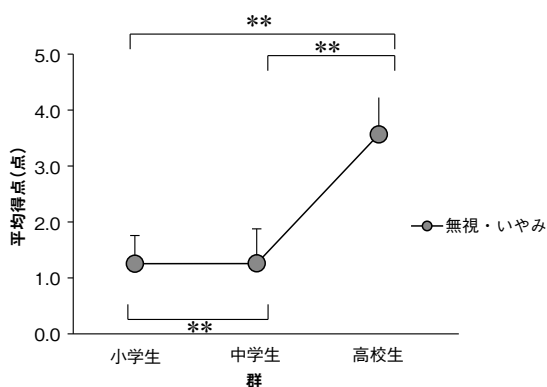


図 1-2 無視・いやみ

<子ども扱い>

分散分析の結果、主効果 ($F(2,1365) = 4600.71$, $p < .01$) が認められた。そこで、多重比較を行ったところ、小学生と高校生および中学生と高校生で「子ども扱い」による違いがあった ($p < .01$)。

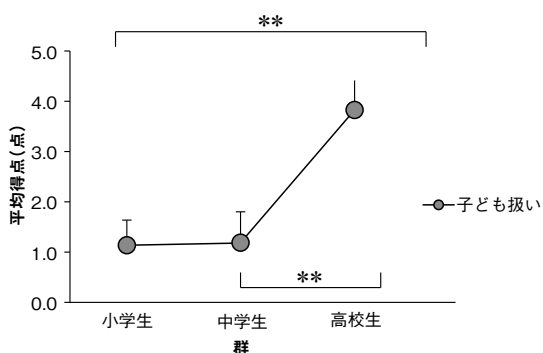


図 1-3 子ども扱い

<声掛け・手助け>

分散分析の結果、主効果 ($F(2,1365) = 244.71$, $p < .01$) であった。そこで多重比較を行ったところ、小学生と中学生、小学生と高校生、中学生と高校生で「声掛け・手助け」による違いがあっ

た ($p < .01$)。

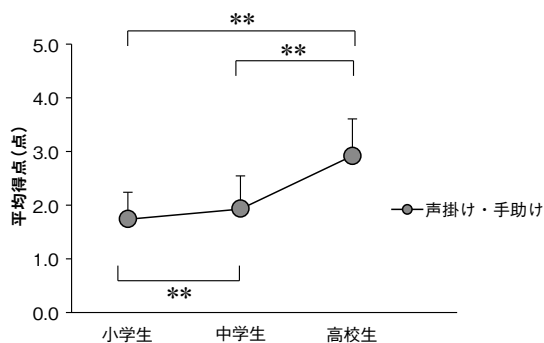


図 1-4 声掛け・手助け

②高齢者に対するイメージ

図 2-1・2・3・4

<暖かい・優しい>

分散分析の結果、主効果が認められなかった。つまり、小学生、中学生、高校生で「暖かい・優しい」に関して差異が認められなかった。

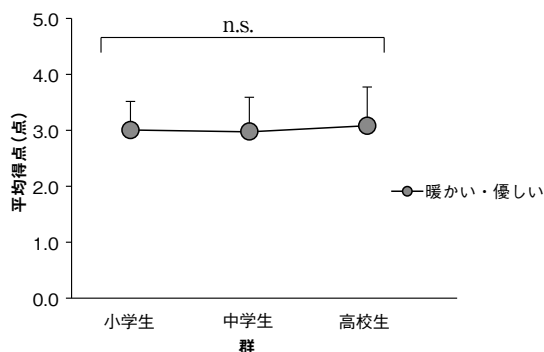


図 2-1 暖かい・優しい

<元気・壮健>

分散分析の結果、主効果 ($F(2,4780) = 9.13$, $p < .01$) であった。そこで多重比較を行ったところ、小学生と中学生および高校生で「元気・壮健」による違いがあった ($p < .01$)。

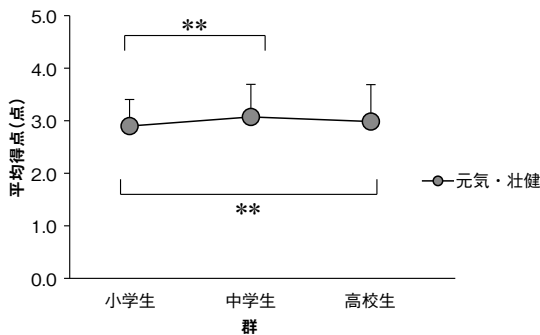


図 2-2 元気・壮健

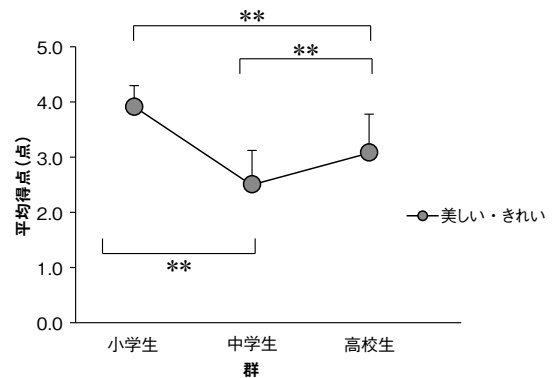


図 2-4 美しい・きれい

<きちんとした・良い>

分散分析の結果、(F(2,2048) = 1497.67, $p < .01$)であった。そこで多重比較を行ったところ、有意水準 1% で小学生と中学生および高校生、中学生と高校生で「きちんとした」による違いがあった ($p < .01$)。

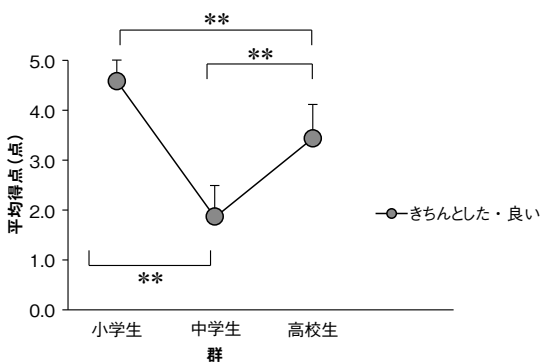


図 2-3 きちんとした・良い

<美しい・きれい>

分散分析の結果、主効果 (F(2,1365) = 257.94, $p < .01$) であった。そこで多重比較を行ったところ、小学生と中学生および高校生、中学生と高校生で「美しい・きれい」による違いがあった ($p < .01$)。

IV. 考察

本研究では、小・中・高校生を対象に年老いた祖父母や高齢者に対する行為と高齢者に対するイメージに関して調査を行った。

① 年老いた祖父母や高齢者に対する行為

本研究の結果からは、高齢者に対する行為の 4 因子として「大声で怒る」「急がせる」「命令した言い方」「失敗を怒る」「困らせる」を表す「怒る」、「関わりたくない」「聞こえなかったふり」「いやみ」「話のなかに入れない」「わざと世話をしない」を表す「無視・いやみ」、「子ども扱い」「赤ちゃんことば」を表す「子ども扱い」、「声をかける」「手助け」を表す「声掛け・手助け」などは、高齢者の尊厳や倫理観に関わる項目である。「子ども扱い」を除き、小学生でやや否定的であったことが、学年が高くなるにつれ、肯定的に変化している。現在、学校においては、様々な形で高齢者との交流、例えば高齢者施設への訪問などが積極的に試みられている。様々な機会を通じ、高齢者の人権を尊重する態度を育成する機会が増えていけば尊厳や倫理観を培うことができる。このことは、逆に、人権教育の機会がないと、高齢者に対して、不適切な対応が不適切だと認識されずに日常生活の中で当然のことのように行われていることになる。「子ども扱い」「赤ちゃんことば」を表す「子ども扱い」は、学年が上がるにつれて、多くみられている。なかでも「赤ちゃんことば」は場合によっては「言葉による暴力」となりうる。高齢者の多様性や高齢者のもっている能力を過小評価してしまう傾向は否めない。杉井 (2008)⁴⁾ は、不

適切な対応とは、「信頼関係のうえに築かれた予期しうる適切な行為を欠いている事態、単一あるいは繰り返して行われる行為」と述べている。不適切な対応が積み重なれば、虐待へと発展していくことも考えられる。

以上のことから、高齢者に対する行為における発達的变化は、「子ども扱い」を除き、小学生でやや否定的であったことが、年齢が上がるるとともに肯定的になると考えられ、その背景には高齢者との関わりや学習が影響していると考えられる。しかしながら、小学生の段階からより教育現場においてしっかりと高齢者との関わりなどを実施することで高齢者に対する行為も変化すると思われる。

②高齢者に対するイメージ

中野ら(1994)⁵⁾の研究である小学生と中学生の高齢者イメージは、小学3-4年生では、すべての項目(SD18項目、本調査の「自立」を除いた項目と同じ)で中位点以上という肯定的な評価をしている。小学5-6年生では、2項目(「遅い-速い」「小さい-大きい」)を除いた残りすべて中位点以上であり、同様に肯定的なイメージであった。中学生では5項目(「暇そう-忙しそう」「遅い-速い」「小さい-大きい」「弱い-強い」「鈍い-鋭い」)で中位点以下がみられるが、全体的には、肯定的なイメージであった。さらに3者を比較すると、全項目で平均値が小学3-4年生で最も高く、小学5-6年生、次いで中学生の順であり、低学年ほどより肯定的な高齢者イメージであった。主成分分析では、第一主成分「悪い-良い」「ひどい-素晴らしい」「冷たい-暖かい」の高齢者の人格を表す因子とする「評価」、第二主成分は「弱い-強い」「遅い-速い」「小さい-大きい」の高齢者の力や動きを評価する因子「活動性」である。小学生の方が両主成分とも平均値が高く、中学生よりも肯定的な高齢者イメージであった。中学生は第二主成分の活動性についてやや否定的な評価であった。本研究では、因子分析による小・中・高校生の高齢者イメージは、「嬉しい」「すばらしい」「話しやすい」「正しい」などの温和性(内面)を表す「暖かい・優しい」を除き、年齢差による違いが明らかに示された。高齢者の「強い」「早い」「鋭い」「大きい」「元気な」「忙しいそう」「自

立」など的高齢者の行動的かつ活動的な姿勢を表す「元気・壮健」は、各学年で変化がみられ、中学生の方が、小・高校生よりもやや肯定的な評価であること、また、「きちんとした」「良い」「手伝ってくれる」「賢い」などの有能さ(内面)を表す「きちんとした・良い」は、各学年間で変化が大きく、中学生の方が、小・高校生よりも否定的な評価であること、「美しい」「きれい」などの審美性(外面)を表す「美しい・きれい」は学年間で変化が大きく、中学生の方が、小・高校生より否定的な高齢者イメージを抱いていた。「嬉しい」「すばらしい」「話しやすい」「正しい」などの温和性(内面)を表す「暖かい・優しい」は、学年間での変化はみられなかった。本研究は、先行研究と異なった結果が示された。学年間の変化は、古谷野(1993)⁶⁾が指摘するように、対象の年齢による影響、さらにその要因を「成長・発達に伴う基本的な価値観の変化に起因することであるかもしれない」。このことから、高齢者に対する行為やイメージは学年間で変化する可能性が示唆される。学校はそれぞれの発達段階において、人々との交流や様々な活動の機会を提供し、他者を尊重する態度や尊敬する気持ち、他人を思いやる心などを身に付けていくことが必要とされる。

おわりに

超高齢社会を担う子どもたちの高齢者に対する行為、高齢者に対するイメージを小・中・高校期の発達による変化を明らかにした。本研究において、発達段階において、高齢者に対するイメージや行為に変化があることが明らかとなった。今後の研究においては、高齢者に対する行為とイメージに影響すると考えられる要因を検討し、発達段階と学習指導要領の視点で教育の可能性をまとめ、高齢者観の育成プログラムの作成と普及が今後の課題である。

<謝辞>

今回のアンケートはP市役所学校教育課、教育委員会代表および小・中・高等学校の教員・生徒の皆様のご協力に深謝いたします。

引用文献

- 1) 杉井潤子、現代社会における年齢差別（エイジズム）の実態解明と高齢化教育の推進、平成16年度～平成18年度科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書、2007.
- 2) 中野いく子、冷水豊、中谷陽明、馬場純子、小学生と中学生の老人イメージSD法による測定と比較一、社会老年学39、11 - 22、1994.
- 3) 再掲 1)
- 4) 再掲 1)
- 5) 再掲 2)

A Study on Young People's Developmental Change of Images of Senior Citizens and Their Acts: From an Attitude Survey of Schoolchildren, Junior High School Students and High School Students

Shibata, Masue*

本研究では、第一段階の調査として、小・中・高校生の高齢者に対する行為およびイメージに関する質問紙を作成し、妥当性を検討するため因子分析を行った上で群間の比較を行うことを目的とする。さらに、この研究を基盤として発達段階に応じた高齢者に対するイメージや行為などに影響を与える要因の検討に繋げていくことである。調査の項目は、「高齢者に対する行為」15項目（4段階評定）と「高齢者に対するイメージ」（SD法 19形容語対 5段階評定）である。分析の対象は、P市の小学校の3 - 6年生182名、中学校1 - 3年生271名、高等学校の1 - 3年生230名である。結果は、因子分析を行ったところ、高齢者に対する行為は、「怒る」「無視・いやみ」「子ども扱い」「声掛け・手助け」の4因子が抽出された。高齢者に対する行為における発達的变化は、「子ども扱い」を除き、小学生でやや否定的であったことが、年齢が上がるとともに肯定的になることが明らかとなった。次に、高齢者に対するイメージは、「暖かい」「元気・壮健」「きちんとした・良い」「美しい・きれい」の4因子が抽出された。高齢者イメージに対する発達的变化では、「嬉しい」「すばらしい」「話しやすい」「正しい」などの温和性（内面）を表す「暖かい・優しい」を除き、年齢差による違いが明らかに示された。

キーワード：小・中・高校生の高齢者に対する行為・高齢者に対するイメージ, SD法